

工場緑化と樹種の選定

土壌と環境の良否が問題

野菜試験場久留米支場

国 重 正 昭

はじめに

公害問題が、にわかに世間の注目をあびるようになって以来、公害対策の一つとして、工場緑化ということが関係者の間で真剣に考えられるようになってきた。

工場緑化ということは、何も最近に限った問題ではなく、精密機器工場等では製品の品質管理の面から、また業種によっては、企業イメージの向上のために、以前から関心が持たれていたことである。

工場緑化が、公害対策として有効な手段であるかどうかは別として、従来、ごみごみとして煤けたイメージしか無かった工場地帯に緑が復活し、美しい環境が生れるなら、工場従業員にとっても地域住民にとっても、これ以上のことはないと思われる。

工場緑化と副次的な問題の発生

① 植木価格の高騰

しかし、この工場公害問題が、いわば突如として社会問題化し、工場緑化に対しても早急な対策が要求されるにおよび、それに伴う副次的な問題が各地におきつつある。その一つは植木価格の高騰である。

緑化には植木が必要だということで、各地で植木の買いあさりが始まり、価格は平均してここ2～3年で2～3倍にまで暴騰しており、投機的な色合いさえみせつつある。

植木の全国的需給状況をみた場合、決して植木の絶対量が不足しているわけではなく、潜在的な手持ちの植木が市場に出まわるようになれば、逆に暴落の可能性も考えられている。

② 乱伐害のどが

もう一つ困った問題は、苗木生産者の供給する植木では、間尺にあわないということから、山の

木がどんどん掘出されるようになったことである。南九州の山では特にこれがひどく、工場緑化が山の緑をうばい、新しい公害を生んだという結果を示しつつある。

また、大小を問わず、各企業が手持ちの遊閑地を遊ばせておくのはもったいないということから、自社の工場の緑化用の植木をそこで自家生産し、余りがあれば、それを販売して利益をあげようという、いわば素人の植木生産もあちらこちらで計画されている。

工場緑化は純粋に公害対策として考えられるべきであって、そこに利害得失をからませるのは筋違いというべきであろう。

樹種の選定を誤まるな

① 公害に強い樹とはどういうことか

工場は、空気が汚れており、土壌条件も悪いから悪い環境でもでも丈夫に育つ、いわゆる公害に強い木を選んで緑化すべきであるということが一部

< 目 次 >

- 工場緑化と樹種の選定……………(2)
土壌と環境の良否が問題
野菜試験場久留米支場 国 重 正 昭
- <肥料随想>
ユックリズムと肥料……………(4)
香川県農業試験場化学部 安 藤 奨
- 長崎のジャガイモ栽培の
現状と問題点……………(6)
長崎県総合農林センター
愛野馬鈴薯分場 知 識 敬 道
- ウドの栽培と施肥……………(9)
神奈川県横浜農業改良普及所 大 崎 彦 治
- <園芸相談車がやってきた>
ハウス土壌の現地検定と処方箋……………(10)
栃木県経済連農産部 河 野 利 雄
- “ハイ今日わ……。”(営業所めぐり)……………(13)
(1) 東京営業所の巻

では言われているが、これは間違いで、むしろ弱い木を植込んでも木の弱らないような環境づくりをする方向にむかうべきである。場当たりの声に緑化の方向をまどわされることのないよう、気をつけなければいけない。

工場緑化計画に、いわゆる公害に強い木と称して常緑樹を多く使う傾向がみうけられるが、常緑樹は冬も緑葉をつけ、年間通じて酸素の供給能力があるという利点の反面、濃緑色の葉は暗い重苦しい景観をつくる欠点があるので、むしろ落葉樹を主体にして、夏は緑陰樹として木陰を提供し、冬は充分日光の当る、明るい工場緑化計画をたててほしいものである。

② 植込む場所の土壌と環境の良否

工場緑化計画にしたがって植木を植込む場合、まず問題になるのは、植込む場所の土壌の良否である。

空気中の亜硫酸ガスの量とか、排気ガスの害といった、主として植物の地上部に対する影響は従来から論議されているが、植物にとって地上部と同じように、目に見えない地下部の根の生活環境も大切なことであって、地下水位の高い所、排水が悪く水の停滞する所、化学薬品の残留している所、周囲が堅く踏みかためられているような所に植えられたのでは、空気がきれいになり、肥料を充分に与えても、満足な生育をのぞむことはできない。

特に、工場内の敷地はコンクリートのかたまりや、種々の工作物の残滓が地下に埋まっていて、植物にとっては最も不適當な地下環境の所が多く、植込みに際しては充分な地ごしらえが必要である。

③ 植物にとり、好ましい土壌

植物にとって好ましい土は、土の固型分2に対し水が1、空気が1の割合で含まれているような土壌であるといわれている。

米国の試験例によると土2に対しピート1、パーライト1の割合に混合した土が、それに近い物理性をもっているといわれる。

植込みに際しては、植穴は充分深く、広く掘り、上記の割合になるようピート、パーライト等

の土壌物理性の改良剤を混入し、地下部の環境を良くしてやるのが、まず必要である。

植込みと、植込み後の管理が必要

山や野に野生している樹木は、一見いかにも丈夫で、どんな条件の所でも育つと思われがちであるが、実際には野生の植物は、広い範囲の土地のなかから、もっともその植物に適した環境の場所を選んで定着しているのである。

いいかえれば、幸運にもそのような場所で発芽したものだけが、生き残っているのであって、野生の植物だから、放任しておいても良く育つであろうという考えは間違いである。

植えられた植物が、つねに良好環境のもとで成育が続けられるよう、植込み後の管理にも充分気をくばる必要がある。植付けまでは、金も人手もかけるが、あとの維持管理は面倒みないというのでは立派な緑化の成果を期待することはできない。

緑化計画をたてるに当っては、植込み後の維持管理の容易なプランニングをたてることが大切である。いかに高価な木を使用し、見事な植込みを行っても、あとの手入れがむずかしく、いたずらに人手を要するようでは、良い緑化計画とはいえない。

おわりに

日本にはそれなりの事情がある

ヨーロッパやアメリカの一部の工場が、芝生にとりかこまれた美しい環境にあるのを見て、日本でも同じような芝生をつくろうとするならば、大変な費用と人手が必要である。

牧場型の風土をもつヨーロッパでは、芝生そのものがその土地の雑草のようなものであって、モンスーン型の風土の日本では、日本の風土にあった植物を利用するのが後の管理は容易である。

山村の採草地の、なだらかに起伏する山肌の美しさを思えば、設計さえ上手にされているなら、雑草を刈込むだけでも美しい工場緑化をすることはできるのである。